

ゾウの西洋史

——ヨーロッパにおいてアフリカゾウはいつ大きくなったのか——

井上正美

紀元前二一七年のラピアの戦いにおいて、プトレマイオス朝のアフリカゾウとセレウコス朝のインドゾウ（アジアゾウ）^①が相まみえた際、アフリカゾウの多くは戦うことなく敗走したと伝えられる。これを二〇世紀の歴史家トインビーは、「アンテイオコスの十分にしまれたインド象は、巨大ないとこのアフリカ象を敗走させた」と説明している。

「インド象」に対して「巨大な……アフリカ象」というのは、現代人にとつては違和感のない大小関係である。だが、古代の歴史家ポリュビオスは『歴史』の中でこの部分を、アフリカゾウはインドゾウの「体の大きさと力の強さに気おされ、少し近づいただけですぐさま逃げ出してしまふのである」^②（第五卷八四）と語っている。

両者の説明において、アフリカゾウとインドゾウの大小関係が逆になっていることは明らかであろう。歴史家であるトインビーが、情報源であるポリュビオスのゾウの大小関係を何らの注釈を加えることもなく逆にしてしまっているということは、それはそれとして取り上げてみるべき問題かもしれないが、二〇世紀半ばにおいて、「アフリカゾウがインドゾウよりも大きい」という事実がそれほどまでに常識化していたことの表れと解することができるだろう。

一方、ポリュビオスの伝える「インドゾウはアフリカゾウより大きい」という大小関係は、古代著作家に共有された認識であり、こちらも当時の一般的な知識であったと考えることができる^④。二人の歴史家は、それ

ぞれの時代に当然の事実と思われていたゾウの大小関係を踏まえつつ、上述の説明を行ったのであった。

そこで、二つの単純素朴な疑問あるいは興味がわいてくる。アフリカゾウとインドゾウの大小関係という極めて平明と思える事実認識（以下、「ゾウの大小認識」あるいは単に「大小認識」と表現する）において、どうしてこれほど見事に反対の関係が見られるのかという疑問である。われわれ現代人の立場に立って問い直せば、戦争にゾウを使用したほどの古代人が、どうして「アフリカゾウの方が小さい」という明らかに客観的事実とは逆の認識を表明しているのだろうか、という疑問である。

もう一つは、古代と現代とでゾウの大小認識が逆になっていることは、ヨーロッパにおいて、どの時点かでゾウの大小認識に変化があったことになるが、それは何時どのようなようにしてであったのかという疑問である。

最初の疑問に関しては、古代史の専門家たちを中心に、これまでも議論されてきたところである^⑤。ここではこの問題には立ち入らず、後のほうの疑問に照準を絞って、英語の辞書・事典を中心に新しいゾウの大小関係が一般的知識として普及していく経緯と時期とを調査し、今後の議論の叩き台として大まかな転換の見取り図を提出しておきたいと思う。

I

さて、いきなり一九世紀からの開始となるが、一八四三年にフランスの軍人アルマンディが著した『ゾウの軍事史』においても、ゾウの大小認識は伝統的なそれであった。しかも、アジアゾウの体高は通常九〇〜一〇ピエ（約二九三〜三二五センチメートル）。以下、換算の数値に付すべき「約」は全て省略）であるのに対して、アフリカゾウはめったに八ピエ（二六〇センチメートル）を越えることはない、具体的な数字までが提示されている。^⑥

この背景として、中世以降のヨーロッパでは生きたアフリカゾウを見る機会がほとんどなくなってしまう、伝統的大小認識が修正される機会がなかったという一般的な理由に加えて、個別的な出来事を考慮しておく必要がある。

ヨーロッパにおいて始めて近代の科学的な目に触れたアフリカゾウは、一六六八年ポルトガルからフランスのルイ一四世に贈られたゾウであった。生前にはイギリスのジョン・ロックも見学し、死後保存された骨はペローのような学者によって調査された。『百科全書』もこのゾウについて詳しく紹介している。それによると、コンゴ出身のこのゾウは、フランスにやってきた時一七歳、体高六ピエ半（二一一センチメートル）であった。性別は後にメスと判明した。フランスで一二年間生存したが、大方の予想に反し、その間にこのゾウは一ピエしか大きくならなかった。つまり七ピエ半（二四四センチメートル）であった。^⑦

このようにフランスでは、実際そこで生存していたアフリカゾウの体高が知られていたのだが、それはまさにコンゴ出身のマルミミゾウ（*Loxodonta cyclotis*）のそれであった。森林地帯を中心に生息するマルミミゾウは、インドゾウよりはむしろ小ぶりである。そのマルミミゾウ

の体高がアフリカゾウの体高として知られたおかげで、古代からの大小認識は、近代の学者・知識人によっても問題視されることはなく、むしろその確かさが裏打ちされるかたちとなったのであった。

したがって、古代以来引き継がれた伝統的な大小認識が覆されるためには、アフリカゾウという言葉で現在一般に想像される、インドゾウより大きいいわゆるアフリカゾウ（*Loxodonta africana*）^⑧についての確実な情報が知られる必要があった。

では、いわゆるアフリカゾウの情報はいつ知られるようになるのだろうか。手がかりとして『ブリタニカ百科事典』を調べてみよう。一七六八年以来の歴史を持つ『ブリタニカ』だが、アフリカゾウのほうが入ドゾウより大きいという説明が現れるのは、一八四二年の第七版、第一四巻である。

その前の第六版は一八二三年に出ているが、これは第五版（二八一五年）の再版なので、記述内容は一八一〇年代前半までの知的状況を反映していると考えなければならぬが、そこではなお、「アフリカゾウはアジアのものよりは小さいと言われている」との記述がある。それに続けて、「しかし、ロンドンの商人たちは最大級の象牙はアフリカから入ってくる」と断言している^⑩と加えているが、体格についてはかくごとくで、伝統的見解のままである。

ただ、第五版にはゾウの大小認識を考える上で重要な記述がなされている。すなわち、「ゾウの体高は、時々少なくとも一二フィートに達するといわれることもあるが、通常は九ないし一〇フィートである」という記述である。これは、ナチュラリストのコースが、一七九九年の『哲学会報』に発表した見解に基づくコメントである。^⑪

コースという人物は、一八世紀末に一〇年ほどインドで暮らし、その間に自分でもゾウを持ち、また、精力的にゾウについて調査した人物で

ある。彼は、現地の人も、ヨーロッパ人も、この大きな動物をより大きく見たがる傾向があると指摘し、一四フィートあるといわれていたゾウを初めて見たときの彼自身の経験を語っている。そのゾウは彼にも一二フィートはあるように見えたのだが、後に測定してみると一〇フィートを超えていなかったというのである¹⁴⁾。

結局、彼自身の調査や入手した確かな情報から、体高一〇フィートを超えるゾウは一頭のみであった。「私が思うに、ゾウの背の高さは全体に誇張されている。肩までの高さで測ったとき、インドでは、メスの体高は一般に七から八フィート、そしてオスのそれは八から一〇フィートである¹⁵⁾」というのが、インドゾウの体格についてのコースの結論である。ゾウの大小認識の転換と言う観点からどうしてこれが重要なのかといえば、次の理由からである。

コースも指摘したように、もともと巨大な動物であるゾウについては、その大きさが誇張される傾向にある。古来よりそれはそのとおりで、プリニウスの「エティオピアは高さが二〇キュービットもあって、インドのそれに匹敵するゾウを産する¹⁶⁾」という文章はその典型である。

二〇キュービットといえば一〇メートル前後になる。このようにゾウ一般について誇張はありうるのだが、ヨーロッパでは伝統的にインドゾウがより巨大であったので、特に、インドゾウの巨大さが強調される傾向にあった。さすがにプリニウスほどの数字ではないが、アエリアヌスは「インドゾウは高さ九キュービット、幅五キュービットあると思われる¹⁷⁾」としている。一八世紀になっても、ゴルドスミスの『動物誌』では、「アフリカでは最大のもので十フィートを越すものはいない。アジアでは十フィートから十五フィートくらいのもがある¹⁸⁾」と解説されている。

十五フィートでも四五七センチメートルあるので、このあまりに巨大

なインドゾウのイメージが修正されない限り、たとえアフリカゾウについて、大きいものは体高四メートルといった情報が伝えられたとしても、それが直ぐにインドゾウを上回る数字とは認識されない可能性があったのである。この点でコースの貢献は大きかったと言える。

『ブリタニカ』第五版が「……この動物に関する多くの事柄の解明についてはジョン・コース・スコットに負うところが大きい」と評価しているほか、一八一〇年代から三〇年代にイギリスで出版された百科事典は彼に言及するか、あるいはゾウについての説明の多くを彼に求めている。さらには、一八七〇年のフランスの『一九世紀ユニヴェルセル大事典』も、「最終的に、一八世紀の終わり頃にイギリス人コースが、この動物についての既存の知識に多くのものを付け加えた」と評しており、一九世紀ヨーロッパにとって、単に体格に関してのみならず、インドゾウについての客観的な知識を知る上で、コースは欠かすことのできない存在であったと考えられる¹⁹⁾。

こうして、一九世紀の早い時期には、誇張されがちだったゾウの体格が修正され、特にインドゾウについてより現実的な数値が知られるようになっていた。あとは、いわゆるアフリカゾウについての信頼できる情報が必要であったが、こちらは、誰が、何時、ヨーロッパに伝えたのであろうか。

『ブリタニカ』第七版（一八四二年）には次のような説明が見える。

「アフリカゾウと東部のゾウの両方とも、その大きさは誇張されていると見て良いだろう。ヒル博士は、十分に成長した場合、彼らは一七から二〇フィートになると断言している。通常のサイズよりも大きい個体でも、後の方の寸法の半分くらいが恐らくより真実に近く、一二フィートは非常に背が高いということが出来るだろう。それでも、アフリカゾウの方がインドゾウより大きいということは（分類学者ではなく旅行家た

ちによってではあるが）指摘されているところである。」¹⁷

実例として、一八二二・二四年に探検を行ったデナムの伝えるところが紹介されている。デナムによると、チャド湖付近で彼は体高一六フィートと目算される巨大ゾウに出会ったのであった。ただし、その後、彼が実際に測定した別の個体は一二フィート半であった。¹⁸

ところで、右に訳出した文章には少々解説が必要であろう。「アフリカゾウと東部のゾウ」とあるが、この「東部」はアジアのことではなくアフリカの東部のことである。ヒルの数字も、したがって直接的にはアフリカゾウの体高をさすものとして引かれている。この一七から二〇フィートという驚くべき体高は、ヒルが一七五二年に刊行した『総合博物誌』¹⁹からのものなので、一八世紀半ばにアフリカゾウをこれだけ巨大な存在と見る人がいたことを示しており、この点、注目に値する。

ただし、ヒルの場合、ゾウ (*Elephas*) は一属一種としており、この体高も特別にアフリカゾウが大きいことを示すべく紹介されているわけではない。したがって、これも基本的には上に述べたゾウの巨大さを誇張する文章の一つと理解しておくべきもののように思われる。一八六一年の著作でテネットも、そのようなかたちでヒルの体高を紹介している。ただ、ヒルはエレファスの項の最後のところで、ゾウの生息している地域に触れて、より暖かい地域や、より寒い気候のところにも生息しているとはしているものの、具体的な地名としてはアフリカだけを出しており、『ブリタニカ』がヒルのあげた体高の数値をアフリカゾウのそれとして使用しているのはこの理由からであろうと推察される。

話を本筋に戻すと、コースのインドゾウについての数値と、デナムのアフリカゾウの測定値が合わさることによって、新しい大小認識が成立することになるが、デナム自身は、アフリカゾウが一二フィート半あったから、インドゾウよりはアフリカゾウが大きいのだと、新しい大小認

識を表明しているわけではない。一八二九年の『ロンドン百科事典』でもコースに依拠した記述は多く見られるが、デナムへの言及は無く、大小認識は伝統的な認識のままである。

また、上に訳出した文章を含め、一八四二年の『ブリタニカ』第七版のアフリカゾウについての説明は、すでに、一八三〇年に出版された『アフリカにおける発見と冒険の物語』に、ほぼそのままのかたちで見られるが、この著作には『ブリタニカ』に見えるデナムへの言及や、「アフリカゾウの方がインドゾウより大きい」という大小認識は表明されていない。同じく一八三〇年出版の『エディンバラ百科事典』もコースには言及しているが、デナムへの言及は無く、アフリカゾウは通常の体高が八から十フィート、インドゾウは八から一二フィートと紹介している。²⁰

それどころか、一八三七年の『ペニー百科事典』は、インドゾウについてはコースに全面的に依拠し、アフリカゾウのところではデナムに言及しているが、「アフリカゾウはインドゾウより小さい」と伝統的大小認識を語っている。そして、先述したように、一八四三年という時点でも、フランスのアルマンディは伝統的大小認識を表明していた。²¹

こうしてみると、一八四二年、『ブリタニカ』第七版の「アフリカゾウの方がインドゾウより大きい」という指摘は、かなり先駆的なもののみなしてよさそうに思われる。

II

右の検討から、少なくともイギリスに関しては、一八四〇年前後に新しい大小認識が登場するのではないかと想定される。これが、デナム以降のアフリカ探検家やハンターの齎す情報によって強化され広まってい

くことになるのであろう。この観点からガワーズはゴードン・カミング、オズウェル、ペーカー、セルースと言ったハンターとして著名な人物の名を上げている。^⑤だが、新しい大小認識をより早く、明快に指摘した人物としてリヴィングストンの名を加えておく必要があるのではないかと思われる。

彼が『南アフリカにおける伝道の旅と調査』を発表したのは一八五七年であった。この著作の中で、リヴィングストンはゾウについても具体的な数値を上げて説明している。まず、一八四九年にヌガミ湖近くのゾウガ川流域でゾウを見た時、この地域のゾウは体高が一一フィート（三五センチメートル）だが、南のリンポポ川あたりのゾウは一二フィート（三六八センチメートル）を越える。一方、より北の地方では九フィート（二七四センチメートル）ほどであると述べている。^⑥この箇所ではインドゾウとの比較はなされていないので、あらかじめインドゾウの体高が頭に入っていないと、アフリカゾウにはインドゾウより大きいのがいると判断するのは難しい。

しかし、もっと後の部分でザンベジ川流域でのゾウ狩りについて語った際は、この流域のゾウの体高を九フィート九インチ（二九七センチメートル）から九フィート一〇インチ（二九九センチメートル）と紹介した後で、「南の方にいるアフリカ象は体が大きいので、インド象とすぐ区別できる」と、はっきりとインドゾウより大きなアフリカゾウの存在を指摘している。

これに対してゴードン・カミングやセルースの代表作には明快な大小比較の文章は見られないようである。サミュエル・ペーカーの場合も、数値を上げて大小比較の文章を書くようになるのは、彼が一八六一年にアフリカで活動するようになってからであった。^⑦

しかも、アフリカゾウの方が大きいという認識を提示している一八六

〇年代の二つの代表作で、ペーカーはアフリカゾウの体高として、オスの体高は普通一〇フィート六インチであると紹介している。セルースの著作にも、アフリカゾウの体高としては、九フィート一インチ、一〇フィート、一〇フィート四インチという測定値が上げられている。デナムやリヴィングストンのように一二フィートという、アフリカゾウの中でもより大きいほうの数字は出されていない。『ブリタニカ』にしても、一八七九年に出た第九版では、アフリカゾウは「高きでインドゾウを幾分しのいでいる、肩までの高さが一一フィートを超えるということは決してないけれども」と、一二フィートになる可能性はないような説明となっている。^⑧

こうしてみると、リヴィングストンは、他の著作家たち比べ、インドゾウよりもアフリカゾウが大きいことを、より早く、より明瞭に説明しているという印象が強い。初版二万部が直ぐに完売したというこの著作の人氣とその後のリヴィングストンの話題性を考え合わせると、この本が、新しいゾウの大小認識を広めることに大いに貢献したのではないかと考えたい。だが、管見するところでは、後述の『オックスフォード英語辞典』のような例はあるものの、インドゾウとアフリカゾウの大小を説明する際、彼の文章が引用されたケースはあまりないように思われる。ドイツやフランスの文献^⑨も含め、むしろ、サミュエル・ペーカーが引用されるケースが多いようであり、新しい大小認識の普及、常識化という観点からすれば、彼の貢献度のほうが大きいようである。

そのペーカーであるが、一八六〇年代にはアフリカゾウの体高として一〇フィートといった控えめな数値をあげていたが、一八九〇年になると、アフリカゾウのジャンボは体高が一一フィート、体重は六トン半あったことを指摘し、「アフリカではもつとずつと大きいのを見たことがあるが、インドにはジャンボに近い大きさのものは全くない」とコメ

ントするようになる。さらには、「幼いときから飼育下にあったけれども、ジャンボは一一フィートに達したのだから、野生にあってはアフリカゾウが一二フィート、あるいはそれ以上になるであろうことは容易に想像されるところであろう」と述べ、アフリカゾウ全体の平均的数値というよりも、一二フィートという、アフリカゾウでもより大きいクラスの体高を提示するようになる。

ジャンボとは、一八六五年にロンドン動物園にやってきて、その人懐っこさと巨体とで絶大な人気を博したアフリカゾウである。一八八二年のアメリカへの売却騒動、一八八五年の劇的な鉄道事故死により、さらなる話題をさらい、死後も剥製、骨格標本としてその巨大さを示し続けたのであった。^② このジャンボの存在が、少なくとも英米においては、アフリカゾウの巨大さを示す具体例となつて、新しいゾウの大小認識の浸透を容易にしたところがあったのではないかと考えられる。そして、ベーカリーの説明にも感じられるように、ジャンボの体高一一フィートが想起されることで、アフリカゾウの体高の説明に際し、より大きな数値が使用される傾向が強まったように思われる。

ジャンボには言及していないが、彼の死の翌年、一八八六年にニューヨークで出版された『ユニヴァーサル百科事典』においても、インドゾウは体高が一〇フィートを超えることはめつたにないが、アフリカゾウはより大きく、時に一二フィートになると述べられている。^③

一八九四年にリデッカーが編集した『ロイヤル・ナチュラル・ヒストリー』第二巻では、アフリカからの報告として、一〇フィートと一〇フィート八インチというアフリカゾウの体高を紹介した後で、有名なジャンボはこれらを凌いでいると指摘している。さらに、ベーカリーがアフリカでジャンボよりもずっと大きなのを見たと述べていることも伝えている。ちなみにこの本にはリヴィングストンからの引用もあるが、多くの

情報は、やはりベーカリーから引かれている。^④

同年、ボストンで出版された『博物学授業』という学習指導マニュアルでは、アフリカゾウの方がより大きいという指摘は無いが、最大のゾウは一二フィートに達するとし、「我が国とイギリスの子どもたちの誇りであったジャンボは、一二フィートまではなかった」とコメントしている。その他の箇所にもジャンボについての記述が見られる。

流れは二〇世紀にも続く。一九〇五年、ニューヨークで出版された『若者の博物学百科事典』では、動物園やサーカスのゾウは多くがインドゾウであるが「ジャンボはアフリカゾウであった」と言う説明を始め、ジャンボの紹介がある。インドゾウの体高は七から一〇フィート、アフリカゾウの体高は一〇から一二フィートとなっている。一九〇九年のケンブリッジ博物誌、第一〇巻『哺乳動物』も、ベーカリーに言及しつつ、アフリカゾウは一二フィートに達すること、ジャンボは一一フィートであったこと、そして、インドゾウはアフリカゾウほどの体高にはならないことが指摘されている。^⑤

こうして、一八八〇年代以降はアフリカゾウについて、穏当な平均的体高の数値よりも、一二フィートという数字が良く使われるようになり、少なくとも英米両国においてはジャンボの事例を絡めながら、八、九〇年代に、アフリカゾウが如何に大きいかということと共に、インドゾウよりも大きいという新知識が、一気に広まっていったと見てよさそうである。

だが、その九〇年代にもなお興味深い事例が見られる。

一八九四年にフィラデルフィアで出版された『エンサイクロペディア・ディクシヨナリー』第二巻には、各専門分野からの協力者として、動物学関係では四人の名前が挙がっているが、その中にA. D. Bartlettという名前が含まれている。^⑥ おそらく、ジャンボがいた時のロンドン動

物園の園長であったバートレットであろう。この人物が含まれ、ジャンボの劇的な死から一〇年もたない時点で作られたこの事典であるが、ゾウの大小関係については、大きいのはインドゾウであると伝統的な大小認識を採用している。

さらに、『オックスフォード英語辞典』の初版にあたる『新英語辞典』の第三巻は一八九七年に出版されたが、Elephantの項には次のようである。

…… only two now exist, the Indian and African ; the former (the largest of extant land animals) is ……

このように *OED* もなお伝統的な大小認識を表明している。しかも興味深いことに、本文の下に文献とそこからの引用文が掲載されているが、ゾウの体高については先に取り上げたりヴィングストンの『伝道の旅』が挙げられ、ザンベジ川流域のゾウの体高九フィート九インチから九フィート一〇インチが引かれている^④。

この体高が紹介されている同じ段落で、南の方のアフリカゾウは大きさをインドゾウと区別できると指摘している文献を用いながらの *OED* 本文の説明は、伝統的知識の重みと解しておくべきであろうか。一九八九年の改訂版で、インドゾウとアフリカゾウの順番が入れ替わるまで、*OED* の世界ではインドゾウがアフリカゾウよりも大きいままだったのである。

伝統的な大小認識の根強さは英米に限ったことではなかったようである。一八九七年に、「アフリカゾウの家畜化」という論文を書いたフランスのブルダリーは、当時広がっており、修正の必要なゾウについての誤った認識として、古代からの大小認識をあげている^④。しかし、この伝統的認識も少なくとも辞典や博物学の出版物の世界では一八九〇年代をもってほぼ終わりを告げ、一九〇〇年以降はアフリカゾウが大きいとい

う大小認識で統一されてしまったように見える^⑤。

以上の検討から、英米両国においては、大きく見ると一八四〇年前後から一九〇〇年までの六〇年ほどをかけて、新しい大小認識に転換していったと見ておくことができようである。その中でも特に重要なのが一八八〇年代後半から九〇年代で、この時期にアフリカゾウの大きさがより強調されるかたちで、新しい大小認識が浸透していったと見られる。

その背景には、ジャンボの功績のみならず、いわゆるアフリカ分割時代のヨーロッパとアフリカの関係、あるいはヨーロッパ人の持つアフリカ観があったように思われる。文明化の使命を担ってアフリカに進出したヨーロッパ人にとって、野生のアフリカゾウは、文明を阻む暗黒大陸アフリカの荒々しい自然を象徴し、代表する存在と見えたのではないだろうか。そして、そうであればあるほど、アフリカゾウの大きさと荒々しさが強調されることになったのではないだろうか^⑥。

この観点からすると、「インドゾウは温順で人に使役され、アフリカゾウは気が荒く家畜化できない」という、ゾウについて聞かれたもう一つの常識のほうも気になってくる。こちらについても、その起源と常識化の経緯をたどり、「アフリカゾウの方が大きい」という大小認識の浸透の問題とともに、ヨーロッパの植民地支配との関連の中で考察してみる必要があるように思われる。ゾウの西洋史はなお探索すべき未踏の領域をたたえた主題といえようである。

注

① 「インドゾウ」より「アジアゾウ」を使用すべきであろうが、ここで扱う多くの英語圏の著作で「インドゾウ」が使用されているので、「インドゾウ」を使用することにする。表記は「インドゾウ」「アフリカゾウ」

と全てをカタカナで表記する。ただし、引用文や内容を紹介する文献については、それぞれの使用している用語、表記に従う。

- ② A・J・トインビー 『クレニスム 一つの文明の歴史』 (秀村欣二・清水昭次訳) 東京：紀伊國屋書店 一九六一年 一九五頁。
 Arnold J. Toynbee, *Hellenism: the History of a Civilization*, London: Oxford Univ. Pr., 1959, p.175.
- ③ ポリビオス 『歴史』2 (城江良和訳) 《西洋古典叢書》 京都：京都大学学術出版会 二〇〇七年 二四六頁。Polybius, *The Histories, with an English tr. by W. R. Paton*, Vol. 3, the Loeb classical library: no. 138, London: W. Heinemann, 1923, p. 205. なお、竹沢訳の邦訳本もある。『世界史』(竹島俊之訳) 第二巻 東京：龍溪書舎 二〇〇四 四三九頁。
- ④ H. H. Scullard, *The Elephant in the Greek and Roman World*, London: Thames and Hudson, 1974, pp. 60 - 61.
- ⑤ Hans Delbrück, *Geschichte der Kriegskunst in Rahmen der Politischen Geschichte*, Berlin: Stilke, 1900, p. 252. Edwyn Bevan, *A History of Egypt under the Ptolemaic Dynasty*, London: Methuen, 1927, pp. 176 - 177. W. W. Tarn, *Hellenistic Military and Naval Developments*, (first pub. 1930), New York: Bibloll and Tnnen, 1966, p.99. Id., "Polybius and a Literary Commonplace", in *The Classical Quarterly*, Vol. XX, 1926, p. 100. M. Cary, *History of the Greek World from 323 to 146 B.C.*, (first pub.1932), London: Methuen, 1968, p. 92. Sir William Gowers, "African Elephants and Ancient Authers", *African Affairs*, 1948, pp. 173- 180. Scullard, *op. cit.*, pp. 61 - 63, 265. F. W. Walbank, *The Hellenistic World*, Brighton, Sussex: Harvester Press, 1981, pp. 201 - 202. ウォールバンク 『クレニスム世界』 東京：教文館 一九八八年 二八四・二八五頁。
- ⑥ P. D. Armandi, *Histoire militaire des éléphants, depuis les temps les plus reculés jusqu'à l'introduction des armes à feu*, Paris: D'Anyot, 1843, pp. 1, 3.
- ⑦ 村上嘉津 『ヴェルサイユ春秋』 東京：東京創元社 一九五七年 一四九・一五〇頁。Pierre Larousse, *Grand Dictionnaire Universel du XIX^e Siècle*, Tome Septième, Paris: Administration du Grand Dictionnaire Universel, 1870, p. 332. F. Frade, "Les deux premières vertèbres chez les Elephants d'Afrique", *Bulletin de la société Portugaise des sciences naturelles*, Tome XI, N. 25, 1933, p. 278. *Encyclopédie*, mis en ordre & publié par M. Diderot et M. D'Alembert, Tome Premier, (Reprint of the 1751 ed.), New York: Readex Microprint, 1969, p. 499.
- ⑧ プリニウスの動物誌が種を分けたことについては、DNAの研究が進むにつれて種レベルでの相違が有力視されるようになった。Laura Tangley, "In Search of Africa's Forgotten Forest Elephant", *Science*, Vol. 275, 1997, pp. 1417 - 1419. Gretchen Vogel, "African Elephant Species Splits in Two", *Science*, Vol. 293, 2001, p. 1414. Alfred L. Roca, Nicholas Georgiadis, Jill Pecon-Slattery, Stephen J. O'Brien, "Genetic Evidence for Two Species of Elephant in Africa", *op. cit.*, pp. 1473-1477. DNAバンク(INSDDC)目次; http://kukulab.genes.nig.ac.jp/ddbj/card.cgi?project_id=218104
- ⑨ *Encyclopaedia Britannica*, Seventh Edition, Vol. XIV, Edinburgh: Adam and Charles Black, 1842, p. 147.
- ⑩ *Encyclopaedia Britannica*, Fifth Edition, Vol. XII, Edinburgh: the Encyclopaedia Press, 1815, p. 468.
- ⑪ *Ibid.*, p. 468. John Corse, "Observations on the Manners, Habits, and Natural History of the Elephants", *Philosophical Transactions*, 1799, pp. 31 - 55.
- ⑫ *Ibid.*, p. 36.
- ⑬ *Ibid.*, p. 35.
- ⑭ 『プリニウスの博物誌』(中野定雄 中野里美 中野美代訳) 東京：雄山閣 三三三頁。Pliny, *Natural History*, with an English tr. by H. Rackham, Vol. 3, the Loeb classical library: no. 353, London: W. Heinemann, 1956, p. 29.
- ⑮ Aelian, *On the characteristics of animals*, with Eng. tr. by A. F.

- Scholfield, Vol. 3, the Loeb Classical Library: no. 449, London: W. Heinemann, 1959, p. 91. 『コーネリウス『ス』『コーネリウス』動物誌』(玉井東助編訳) 第三巻 東京: 原書房 一九九四年 二二二頁。
- ①⑨ *Encyclopaedia Britannica*, Fifth Ed., p. 468. John Mason Good, Olinthus Gregory, and Mr. Newton Bosworth, *Pantologia*, London: Printed for G. Kearsley, Vol. IV, 1813, n.p.. Abraham Rees, *The Cyclopaedia*, London: Longman, Vol. XII, 1819, n.p.. *The London encyclopaedia*, Vol. VIII, London: printed for Thomas Tegg, 1829, p. 169. David Brewster (cond.), *The Edinburgh Encyclopaedia*, Vol. VIII, Edinburgh: Printed for Blackwood, 1830, p. 553. *Penny Cyclopaedia*, Vol. IX, London: Charles Knight, 1837, pp. 347, 350-351. Pierre Larousse, *op. cit.*, p. 332.
- ①⑪ *Encyclopaedia Britannica*, Seventh ed., Vol. XV, p. 147.
- ①⑫ *Ibid.*, p. 147. Major Denham, F. R. S., Captain Clapperton, and the Late Doctor Oudney, *Narrative of Travels and Discoveries in Northern and Central Africa, in the Years 1822, 1823, and 1824*, VOL. 1., (first pub. 1826), London: Darf Publishers, 1985, pp. 121, 314.
- ①⑬ John Hill, *A General Natural History*, Vol. III, London, 1752, p. 565.
- ①⑭ Sir J. Emerson Tennent, *Sketches of the Natural History of Ceylon*, London, 1861, p.98 and note 8; <http://lakdiva.org/books/tennent/c03.html>
- ①⑮ Hill, *op. cit.*, p. 567.
- ①⑯ *The London encyclopaedia*, Vol. 8, p. 169.
- ①⑰ Robert Jameson, James Wilson, and Hugh Murray, *Narrative of Discovery and Adventure in Africa: from the earliest ages to the present time*, Edinburgh: Oliver & Boyd, 1830, p. 425; http://books.google.co.jp/books?id=A9kDAAAAQAAJ&pg=PP7&dq=Narrative+of+Discovery+and+Adventure+in+Africa:+oliver+%26+boyd&as_brr=3#PPA425,M1
- ①⑱ *The Edinburgh Encyclopaedia*, Vol. VIII, pp. 556 - 567.
- ①⑲ *Penny Cyclopaedia*, pp. 350 - 352. Armandi, *op. cit.* pp. 1, 3.
- ①⑳ Gowers, *op. cit.*, p. 175.
- ②① David Livingstone, *Missionary Travels and Researches in South Africa*, London: J. Murray, 1857, p. 71. リヴィンストーンの『アフリカ探検記』(菅原清治訳) 《世界探検紀行全集 九》 東京: 河出書房 一九五四年 六一 - 六二頁。
- ②② 龍澤書 三十一六 - 三十一七頁。 *Ibid.*, p. 563.
- ②③ R. Gordon-Cumming, *A Hunter's Life in South Africa*, (facsim. reprod. of the 1850 ed.), Vol. 1, 2, Bulawayo: Books of Zimbabwe, 1980. Frederick Courteney Selous, *A Hunter's Wanderings in Africa*, (repr. from the 1881 ed.), Alexander NC: Alexander Books, 2001. Samuel White Baker, *The Rifle and The Hound in Ceylon*, (first pub. 1853), Project Gutenberg Etext; <http://www.gutenberg.org/etext/3231>, 2002. Id., *Eight years' wandering in Ceylon*, (first pub. 1855), Cirencester: The Echo Library, 2005.
- ②④ Samuel White Baker, *The Albert N'yanza, Great Basin of the Nile And Explorations of the Nile Sources*, (first pub. 1866), Dodo Press, n.d., p. 137. Id., *The Nile Tributaries of Abyssinia and the Sword Hunters of the Hamran Arabs*, (first pub. 1867), Cirencester: The Echo Library, 2005, p. 232. *Encyclopaedia Britannica*, Ninth Edition, Vol. VIII, Edinburgh: Adam and Charles Black, 1879, p. 124.
- ②⑤ Leila Koivunein, "Visualizing Africa — Complexities of illustrating David Livingstone's *Missionary Travels*", *Ennen & nyt*, Vol.1: The Papers of the Nordic Conference on the History of Ideas, Helsinki; <http://www.emnenjanyt.net/2-01/koivunen.pdf>, 2001, p. 2.
- ②⑥ Dr. Heinrich Bolau, *Der Elefant in Krieg und Frieden und seine Verwendung in unsern Afrikanischen Kolonien*. Hamburg: Verlag von J. J. Richter, 1887, S. 8. M. Paul Bourdarie, "Domestication de l'Éléphant d'Afrique, Quelques Erreurs Scientifiques et Populaires sur l'Éléphant d'Afrique", *Compte rendu/Association Française pour l'Avancement des Sciences*, Paris, 1897, p. 571.
- ②⑦ Samuel White Baker, *Wild Beasts and their Ways*, (first pub. 1890), Project Gutenberg Etext; <http://www.gutenberg.org/etext/3657>, 2003,

- pp. 26 - 27.
- ⑳ シャンボのついでに次の文献を参照。Les Harding, *Elephant Story: Jumbo and P. T. Barnum under the Big Top*, Jefferson: MacFarland & Company, 2000. 拙稿 「シャンボ——その生涯と人気の秘密」 『立命館文学』 第五九七号 二〇〇七年 二七七 - 二八七頁。
- ㉑ A. J. Johnson, *Universal Cyclopaedia*, New York: A. J. Johnson, 1886, p. 620.
- ㉒ Richard Lydekker, (ed.), *The Royal Natural History*, Vol. II, London: F. Warne, 1890, pp. 545 - 546.
- ㉓ *Lessons in Natural History*, Modern Methods or the Art of Teaching : Vol. 3, Boston: Educational Publishing, 1890, pp. 72 - 73, 75.
- ㉔ John Denison Champlin, *Young Folks' Cyclopaedia of Natural History*, New York: Henry Holt, 1905, pp. 200, 210-211. Frank Evers Beddard, *Mammalia*, The Cambridge Natural History, ed. by S. F. Harmer and A. E. Shipley, Vol. 10, London: Macmillan and Co., 1909, p. 221.
- ㉕ 一八九八年の『図解新ラールス』ではアフリカゾウの体高は五メートルという大きな数字となつてゐる。 *Nouveau Larousse illustré*, publié sous la direction de Claude Augé, Tome IV, Paris: Librairie Larousse, 1898, p. 14.
- ㉖ Robert Hunter (ed.), *The Encyclopaedic Dictionary*, Vol. 2, Philadelphia: Syndicate Pub. Co., 1894, title page and p. 1842.
- ㉗ James A. H. Murray (ed.), *New English Dictionary on Historical Principles*, Vol. 3, Oxford: Clarendon Press, 1897, p. 84.
- ㉘ *Ibid.*, p. 85.
- ㉙ J. A. Simpson and E. S. C. Weiner (prep.), *Oxford English Dictionary*, Second Ed., Vol. V, Oxford: Oxford University Press, 1989, p. 134.
- ㉚ Bourdarie, op. cit., pp. 570 - 571.
- ㉛ ただし、一九三三年に刊行された『簡約オックスフォード英語辞典』は、次のような文章になつてゐる。“Only two species now exist. The Indian and the African; the former of which (the largest of extant land animals) is often used beast of burden.” OEDに基づいて、この制約があつたとしても、そのだるまか、ハリビオ、二種のパンチアフリカンウの方がより大きかつた説明になつてゐる。William Little (ed.), *The Shorter Oxford English Dictionary*, Oxford: Clarendon Press, Vol. 1, 1933, p. 593.
- ㉜ シャンボの人気の秘密も、この巨大で荒々しいアフリカの自然を文明が手なづけ文明化できたことに対する満足感、安心感がその根底にあつたのではないかと考えてみたくなつてゐる。拙稿 前掲論文。

(本学非常勤講師)